プロジェクトチームによる授業方法の改善
～コミュニケーションツールのログ分析～

Improvement of an instruction by on-line collaboration of instructors and researchers

高橋　朋子　　中植　正剛　　山崎　瞳
Tomoko TAKAHASHI　Masataka NAKAUE　Hitomi YAMASAKI
東郷　多津　　望月　紫帆
Tazu TOGO　Shiho MOCHIZUKI

武庫川女子大学大学　MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
神戸親和女子大学　KOBE SHINWA WOMEN'S UNIVERSITY
環太平洋大学　INTERNATIONAL PACIFIC UNIVERSITY
京都ノートルダム女子大学　KYOTO NOTRE DAME UNIVERSITY
NPO 法人学習開発研究所　INSTITUTE FOR LEARNING DEVELOPMENT

＜あらまし＞　大学全入時代の到来とともに，授業に馴染めず自律的に継続した学習ができない学生が多く見られる。筆者らはプロジェクトチームを結成し，このような学習者が，自律的な学習できるための授業方法の開発を行っている。本稿では，ネットワーク上で活発に議論を展開するために必要としたメンバーの役割分担など，授業方法の改善に利用した Web 上のコミュニケーションツールのログを分析し，その概要を報告する。
＜キーワード＞　授業設計，授業方法，授業改善，FD，コミュニケーションツール

１．研究の背景と目的

近年，大学生の学力は「できる」，「できない」の二極化が進み，基礎学力の低下が問題になっている。また，大学生活における目標意識，学習意欲もさまざまであり，授業に馴染めず自律的に継続した学習ができない学生も多く見られる。

高等教育においては，多様な学生の学習意欲を高め，主体性を引き出す学習開発を行う必要があるが，学生が多様化するほど，教師一人で問題を探り，授業設計していくことに限界がある。

そこで，複数の大学教員と共に，NPO 法人学習開発研究所が主催するプロジェクトでチームを組織し，多様な学習者がともに自律学習できる授業開発を行っている[1)]。メンバーは，授業設計，授業記録などの作業を行うにあたり，主にネットワークを介したコミュニケーションツールを用いて議論を進めてきた。

授業の内容に関するものについては別の場で発表しているので，本稿では，メンバーの役割などについて，コミュニケーションツールのログを分析して報告する。

２．投稿内容の分析

研究対象は，A 女子大学ライティングの再履修生クラスである。英語の授業に馴染めない学生を対象に，自律的に継続的な学習ができる授業を設計し，2007 年度前期に実践を行った[2)]。

授業方法の改善に利用した Web 上のコミュニケーションツール（C-Learning:株式会社ネットマン）は，メンバー専用の画像やファイルが添付できる掲示板で，投稿すると登録メンバーにメールが届くものである。このコミュニケーションツール以外に，対面での打ち合わせ会も行った。第 1 回目の打ち合わせ会でプロジェクトを結成し，研究テーマについて議論を始めた。第 2 回目は，教材作成後に，実践記録のビデオデータ分析を行った。

第 2 回目打ち合わせまでにやり取りした 249 の投稿（事務連絡 34，学会情報 59 を除く）に対し，1 投稿につき 1 タイトルをつけ分類した。投稿された項目と項目数を表 1 に示す。

表１　投稿された項目と投稿数

カテゴリ	項目	投稿数	合計
授業方法	ポイントマップ	32	73
	ポイントの設定・シール	25	
	ガイドラインテキスト	9	
	授業の進め方	5	
	プランニングシート	2	
授業設計	メタファー・再検討・整理	27	62
	イメージの確認	11	
	ユニットの構成	10	
	学生のイメージ	8	
	目標設定・学習する意味	6	
授業内容 授業概要	査定シート	32	73
	診断テスト	13	
	教科書イメージ・教科書の整理	10	
	教材作成	2	
	腕試しテスト	2	
	授業計画	4	
	受講予定者数・授業の概要	4	
	オリエンテーション	3	
	課題評価方法・最終評価	2	
	学習計画	1	
研究方法	メンバーのルール	11	41
	データ起こし	10	
	役割分担	6	
	エフォートの表明	7	
	メーリングリスト・協働版の作成	4	
	プロジェクト結成	1	
	ネット運営方法	1	
	研究の予定	1	

図１に，各メンバー毎のカテゴリ別投稿数を示す。表１の学習内容と授業概要は，投稿数が少ないため，授業にかかわることとし一つにまとめている。また，図１の運営は，表１では省略した事務連絡と学会情報をさしている。M1 は，コーディネータであり，授業記録者である。M2 は授業実践者である。

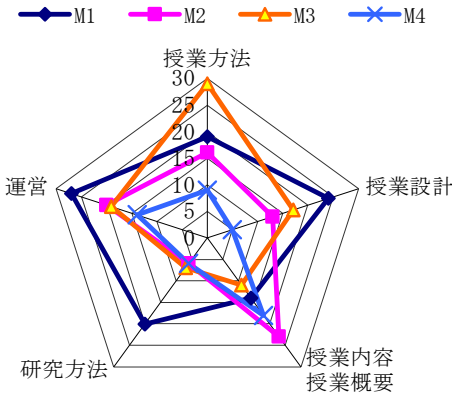

図１　カテゴリ別投稿数

３．授業改善のための討議の流れ

授業改善のために議論された内容（ログから得られた内容）を授業改善のための討議の流れとして，図２に示す。縦軸は，内容から３つの時期に分け，横軸は，授業改善のために討議された項目の流れである。

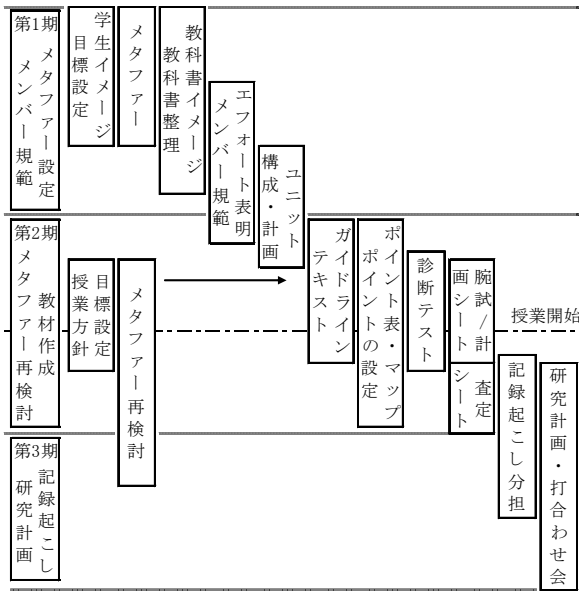

図２　授業改善のための討議の流れ

第１期は，互いに研究目的を共通理解し，互いの意識を高めるとともに，授業改善に対するイメージの一致を図った時期である。第２期は，プロジェクトチームにルールを設け，役割分担を行った直後から，協働で設定したメタファーを基に授業方法・授業内容の検討を行った時期である。第３期は，授業実践を行い，記録をとり，データ分析の分担など，今後の研究計画について議論した時期である。メンバー間のコミュニケーションが活発に行われたのは第２期である。第１期では，メンバーの投稿に偏りが見られ，お互いの意思がうまく伝わらなかった例や，疑問点をうまく質問できずに議論が途切れてしまう例が見られた。

第１期と第２期におけるメンバー4 名（M1,M2,M3,M4）の投稿数を新規発言，メンバーに対する返信に分け比較したグラフを図３に示す。

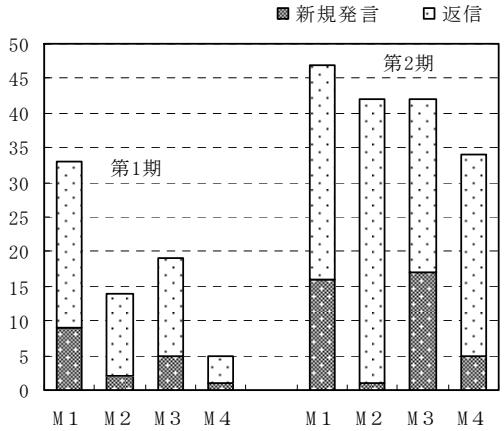

図３　投稿のタイプ

投稿は，新規発言が多いタイプと，メンバーの発言に対してコメントを返信するタイプに分かれる。図１と図３の結果から，役割分担に対して，次のことが明らかになった。

コーディネータ M1 は，全体を見渡し統制をとる役割をした。授業担当者である M2 は，授業内容・授業概要を中心に発言している。また，返信が多くなっている。他のメンバーは，時に，M4 は，授業内容に対する理解が深く，診断テストを分担したため，授業内容に関する発言が多く，第２期に発言が集中している。

４．今後の課題

今後，投稿内容のテキストを分析し，実践授業との関係性を分析し，授業改善を行っていく必要がある。ならびに，データ分析時期におけるメンバーの役割についても調査する。また，実践を行う上では，学習内容，学習者ならびに実践を行う大学に対する共通理解を深める必要がある。

参考文献

１）西之園晴夫，宮田仁，望月紫帆(2006)「教育実践の研究方法としての教育技術学と組織シンボリズム」教育実践学研究 第８巻第１号，日本教育実践学会

２）東郷多津(2007)「英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発方法(1)－再履修生対象の Writing class での適用－」中部地区英語教育学会三重大会